

巻頭言：「必殺仕事女子」

京都文教大学人間学研究所所長 秋田 巖

子どもの頃は、マンガばかり読んでいた。高校生になってやっと本を人並みに読み始め、それからはそこそこ読んだように思う。十年前から古典芸能にはまり、五年前からそれに加え映画とテレビドラマを観はじめた。恥ずべきことながら、映画、ましてテレビドラマなど他の芸術分野と比べレベルが低いものと決めつけていた。太宰治が、気力が低下してくると読書意欲が減少し映画館へ足が向く、と書いていたが、それも尤もと頷いていた。

ところが、観はじめてみるとなかなかの作品が少なからずある。テレビドラマより映画の方が高く評価されているように思うが、テレビドラマも捨てたものではない。質もさることながら、視聴率20%などともなれば、2000万人以上が観ていることになる。日本人の心理に及ぼす影響としてテレビドラマは無視できぬ影響力を持っていると考えた方がよさそうだ。

近頃、「女子力」の語が目立つ。「草食系男子」に対し「肉食系女子」一。本日2011年11月8日の朝日新聞にも「渋谷発 女子力」とか「音響少女」とか、文化面に見出し語として使われている。さて、ここで取り上げるは「必殺仕事女子」。と言って、これは私の造語なのであるが。この語の出自は、『女王の教室』（2005年、脚本：遊川和彦、主演：天海祐希）、『ハケンの品格』（2007年、脚本：中園ミホ、主演：篠原涼子）、『家政婦のミタ』（2011年10月～、脚本：遊川和彦、主演：松嶋奈々子）等。『女王』と『ミタ』は脚本家が同じということもあり、テイストがかなり似ている。『ハケン』は、深刻味が抑えられ、コミカルに描かれているが、この三作品の主人公には共通項がある。まず、女性。ミステリアス。鉄のごとき意志。自分内ルールを半端なく守る。何よりも仕事ぶりが特異過ぎる。破天荒にして非

常識。それゆえ何を考えているかよくわからない。人間離れしている。

『女王』の阿久津真矢は優しい小学校の先生であつたが、連続して身に降りかかる悲劇ゆえ存在のあり様が変わっていく。変えていく。服装も白基調であつたものが、グレイ、黒へと変わっていく。ホワイト・マヤ→グレイ・マヤ→ブラック・マヤへと変貌を遂げ、社会通念を無視して信念を貫く。周囲から見れば鬼教師としか見えない。『ミタ』の三田灯は現在進行形ゆえ、11月上旬現在正体不明だが高いレベルで正確に仕事をこなす。命ぜられれば文字通り何でもしてしまう恐怖の家政婦。『ハケン』の大前春子は「特Aランク」の派遣社員。超難関の資格を26以上持っており、恐ろしいほど素早く正確に仕事をこなす。3か月働いては3か月旅に出るという奇妙な生活スタイル。早くに両親を亡くしているようだ。周囲と関わりをもたない。携帯電話の番号も教えない。時間を一秒たりとも遅れず正確に守る。

ここで、想起されるのは、史上初のアンドロイド演劇《さよなら》。そのアンドロイドも女性。これは石黒浩先生の創造した人型ロボットを登場させ平田オリザが劇化したものであり、史上初・日本発である。ここで詳述する余裕はないが、「必殺仕事女子」はDisfigured Heroの系譜に属するものであり、かつこれから本格的に始まるであろう人型ロボットとの共存に向けての心的準備段階の役目も担っていると考える。このところは近いうちに論文化、著作化の予定であるが、まずは概念のみを提出しておく。

それこそ奇妙な巻頭言を書いたが、ご覧いただければお分かりになるように、例年同様本号にも読みごたえのある論文・報告等が並んでいる。それゆえ自由すぎる巻頭言を書き得たこと、感謝する。